
時空盗賊絵巻

ken

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空盗賊絵巻

【Nコード】

N8320X

【作者名】

ken

【あらすじ】

文禄三年。永きに渡る戦国は豊臣秀吉によって一応の終結を迎え、世は一時の平和を謳歌していた。しかし、民衆は変わらずに飢えと渇きに苦しんでいた。そんな頃、一人の青年が民衆の間で喝采を浴びていた。青年の名は「石川五右衛門」。彼は世の権力者より金銀財宝を奪い取り、民衆達に分け与える義賊として、英雄と崇められていた。そんなある日、大阪の街を大地震が襲い、同時に大阪の街に、見たこともない奇妙な建物が現れるという事件が多発し始める。親しい人々との日常を楽しんでいた五右衛門は見た事もない

建物に好奇心を掻かれ、夜その建物へと侵入する。そこで彼を待ち受けていたのは、『未来人』を名乗る少女と出会った。少女は五右衛門に『この建物は未来から運ばれてきたモノで、誰かが時空を歪め、この街に運び込んでいる』と告げる。その日を境に、五右衛門は過去や未来、そして国全体を巻き込んだ大事件に関わっていく事となる。

第壱譚 Ⅱ 義賊・大阪の闇を駆けるⅡ（前書き）

どうも、k e nです。天下の大泥棒『石川五右衛門』の活躍を、とくにご覧下さい。なお、多くの歴史上の人物が出てきます。大半は歴史に基づいていますが、作者である私の推測も多分に含まれますので、予めご了承ください。

第壱譚 Ⅱ 義賊・大阪の闇を駆けるⅡ

時は文禄。

群雄割拠の戦国時代は、「豊臣の天下」という形で、一応の終結を迎えていた。

第六天魔王と称され、天下統一に最も近いとされていた「織田信長」は、天正十年の夏、京の本能寺にて、当時彼にとって腹心的存在であった「明智光秀」の謀反を受け、天下統一を目前にその生涯を終えた。その後、光秀と並び信長の腹心と称されていた「戦国一番出世の猿」こと「豊臣秀吉」によって明智は討たれ、天下はそのまま豊臣によって統一される事となった。そして、日本の中心地は大阪城が聳え立つ大阪へと移され、世は一時の平和を謳歌していた。

だが、上に立つ者が変われど、民衆には何の影響も無い。

日々祭り事や宴に賑わう大阪の街の界隈に住む者達は、変わらない飢えと渇きに苦しめられていた。

世の平和、戦国の終わりを唱えた所で、実際は何も変わってはいなかったのである。

それに加え、この頃は豊臣政権による庄政、二度に渡る朝鮮出兵の失敗などの原因により、民衆の豊臣政権に対する不満が全国に広まっていた。

所詮はハリボテ。見掛け倒しの平和。

「侍の戦」は終わっても、「民衆の戦」は未だ終わりを見てなかったのだ。

今日も大阪の街の界隈では、多くの者が、飢え、渇き、苦しみ、そしてその命を終えていく。

この悲しき事実を、世の権力者達は知らない。知ろうともしない。結局、戦国の時代から何も変わってなどいなかったのだ。強きが生き、弱きが死ぬ「弱肉強食の世界」は。

だが、そんな民衆にも、一筋の希望の光があった。

それは、民衆の間で囁かれていた、ある噂話。

その内容は、「権力を盾に世を荒らす者達から金銀財宝を奪い取り、救われぬ民衆達に与えてくれる義賊がいる」というものだ。

平成の世ならば、間違いなくこの一言で済まされるだろう。

「根も葉もない噂」、と。

だが、藁をも掴む思いの当時の民衆達にとって、その話は間違いなく「救い」となっていた。

その時代を生き抜くための、「力の源」だったのだ。

例えそれが、単なる噂話に過ぎないとしても。

だが、彼等は知る事となる。

その幻想を現実のものにする者の存在を。

この時代には、存在^い。それが出来る救世主^{キロー}が一人。

その名は。

文禄三年、大阪。

今日も今日とて、城下に夜がやって来る。多くの民や灯りが街を賑わし、正に「お祭り騒ぎ状態」だった。

一時の平和を満喫するかの様に、多くの民達が踊り、歌い、そして笑っている。

彼らは気付いているのだ。

この時代が、そう永くは続かないであろうと言う事を。

度重なる圧政に、民衆の豊臣政権への不満は溜まるばかりだ。太閤秀吉の死と同時に豊臣は滅び、再び時代は「戦の時代」へと突入

してしまうだろう。

さすれば、当然この平和も、泡沫の如く消えてしまう。

民衆は常に、再び到来するであろう動乱の時代の恐怖に怯えながら暮らしているのだ。

だが、だからと言って彼らに出来る事など、何一つとしてない。太閤秀吉に逆らえば、待つのは「切腹」の二文字だけだと言う事を、十二分に理解しているからだ。

今の彼らには、踊り、歌い、笑う事により、この仮初の平和を堪能する事しか出来ない。

だが、それさえ許されない者達が存在するのもまた、事実である。

大阪の界限にすむ民達は、街の喧騒を遠くに聴きながら、大きな溜息を吐いた。

古ぼけた着物、土だらけの汚れた身体、何日も洗っていない髪……顔から生気が感じられない者もざらにいるほどだ。

これが、この大阪の現実である。

賑わいを見せているのは、この国全体から見ればほんの一握りにも満たない。多くの民は、彼らの様に一日を生きる事で精一杯といった状態なのだ。

「ねえ、お母ちゃん……僕、お腹空いたよ」

とある長屋の一室。一人の少年が、目前に座る母親に告げる。

父親が流行り病により他界してから数年、この子の母親は、女手一つでこの子を養ってきた。だが、時代は文禄。女に、まともな職になど就ける筈は無かったのだ。

そのとても純粹で、率直で、そして残酷な問いに、母親は思わず涙を流す。

まだ十にも満たない様な子供に、今の世を理解しろというのも、

そもそも無理な話だ。だが、その何も知らない無知で無垢な問いだからこそ、なおさら母親の心を締め付けてしまう。そして、何も出来ない己の無力さを痛感し、悔やんでしまう。

母親は子供の後頭部に優しく両手を添えて抱きしめ、その胸に子供を抱えた。

「ごめんよ……うちには、お金が無いんだよ……ごめんよ」

子供は、不思議そうに首をかしげ、もぞもぞと頭を動かし、母親の涙に濡れた顔を見つめた。

「お母ちゃん……泣いてるの？」

母親は答えず、必死に涙を拭った。辛いのは自分だけではない。この界限に住む者達も皆、海草汁で一日を乗り切る様な生活を続けているのだ。そして己の胸に顔を埋める子供もまた、幼いながらも今を必死で生きている。

自分だけ、弱い姿を見せるわけには行かない。
そんな思いが、母親の心を侵食した時、

「大丈夫だよ、お母ちゃん」

無邪気な子供の声が、母親の耳を打った。

母親は目を見開き、子供の顔を見る。

子供はニコニコと満面の笑みを浮かべ、母親を見つめていた。
その瞳に、期待や喜びの色を浮かべて。

「前、お母ちゃんが話してくれたでしょ？ 『悪い人からお金を奪って、貧しい人たちに分け与えてくれる正義の味方がいる』って！」

勿論、そんな話は噂に過ぎない。

実際にその様な人物が現れたという話は、聞いた事がある。

だが、あくまで人伝に聞いた話であり、その人物が自分達の前に現れた事は、一度たりとて無かった。

所詮は、その程度の存在。

この生き地獄を乗り切るための気休め。

だが、今日の前でその話をする少年の瞳は、きらきらと言つ擬音語が付くようあ輝きを放っていた。

「だから、きつとその人が僕達を助けてくれるよ！」

少年は無邪気に笑い、母親を見つめた。

その瞬間、母親は確信する。

彼は信じているのだ。自分達をこの地獄から救い出してくれる者の存在を。

母親は見開いて瞳をうすく細め、微笑む。

「そうね……信じましょう。その人を」

自分自身に言い聞かせるように、母親は囁く。

その時長屋の天井を駆け抜けた「影」の存在に、気付く事も無く。

「影」は闇の中を、目にも止まらぬ速さで駆け抜ける。

踊る人々、歌う人々、笑う人々、そして飢えに苦しむ人々も、それに気付く事は無い。誰の目にも映らぬ程の速さで、天井その「影」は走った。

天井の切れ目に辿り付いた時、「影」は跳ぶ。

その時、一瞬だが、月夜に「影」の姿が映し出された。

それは、「青年」だった。

白髪というよりも灰色に近い髪が、夜闇に良く映えている。歌舞伎の衣装を軽量化した様な服装は決して質素ではないものの、「豪華絢爛」と言った印象は一切無い。口元は黒い布で覆われており、背は百八十近くある様だろうか。目元を覆う髪で、顔立ちは良く見えない。

一瞬だけ月明かりに照らされたその姿に気付いた者は、いなかった。

青年は月のスポットライトを抜け、ある一点目掛けて空を駆け下りる。

そこは、城下の一角に聳える、とある屋敷だった。

敷地はかなり広く、門には「豊臣の家紋」が見受けられる。

どうやら、豊臣家直属の権力者が住まう屋敷の様だ。

そしてこの手の権力者は、豊臣に犬が如く媚を売り、その権力で民衆に脅威を与える者が多い。

門の前に立つ番人を二人程見受けられたが、そんな事など構いなしに、青年は屋敷の敷地内へと舞い降りた。

まさか上空から人が入り込んでくるなど、思いもしなかっただろう。

青年はゆっくりと立ち上がると顔を上げ、静寂が夜闇を支配する敷地内を見回す。

その時、

ザッ……ザッ……

向かい側より、草鞋が地を踏みしめる音が耳を打つ。

青年は目を細め、咄嗟に壁に背を預け、息を殺した。

青年は壁から少し顔を出し、歩み寄ってくる足音の正体を確認する。

見ればそれは、おそらく見回りをしていたであろう武士だった。腰に刀を差しているのが見受けられる。

(……………)

青年が目を細めた直後、

ガサツ！

「っ！？ 何奴！」

突如壁の奥より聞こえた物音に、武士は顔を引き締め、刀を構える。

しかし、それに答える声は無く、再び静寂が辺りを支配した。

武士は武器を持つ手に力を入れなおし、意を決した様に物音のした方向へと歩み寄っていく。

寸前まで来たとき、そのまま足に力を入れ、一気に壁と水平になるように身体を移動する。

だが……。

「……………いない？」

そこには、何も無かった。

ただ数十メートルの壁が聳えているだけで、人はおろか、猫すらもない。

「気のせい、か？」

武士は眩き、刀を下ろしてしまった。

直後、武士の視界がぐらりと揺れ、同時に彼の首裏を鈍い痛みが襲う。

武士は何が起こったのかすら分らないまま、その意識を途絶えさせ、地に伏した。

その後ろに立つ者、先ほどの青年は、それを見て大きくため息を吐く。

「悪いな……ちいとはっか、そこで寝ててくれや」

軽い口調で、青年は聞く事も答える事も出来ない武士に告げる。
殺してはいない。もとより彼は、人を殺めるといふ事をしないのだ。

武士が武器を下ろした瞬間、壁の上、つまりは天井の上から降り立ち、彼の首裏に一撃を食らわせたのだ。

青年は倒れた武士から目を逸らし、奥を見据える。

「さあて……行くか」

誰に言うでも無く眩き、青年は駆ける。

彼の今回の目的である一点を目指し。

権力者と言うのは、小心者が非常に多い。

大金や財宝を持つと、どうしても用心深くなるものだ。そのため、多くの武士を用心棒として雇い、深夜に徘徊させている。だが、それは烏合の衆である事が多い。

ただ金のためだけに動く寄せ集めの連中に、青年が止められる筈が無かったのだ。青年は武士達に気付かれぬ様、音も立てずに隠れ、先へと進んでいく。そして最深部へと辿り着いた時、彼はその足を止めた。

そこにあつたのは、闇夜と同化する様に不気味に聳え立つ、巨大な蔵だった。

「こりやまた……随分と立派なのを建てたもんだね」

他に金を使うべき場所がある気もするが。

結局、彼らは自分自身の利益しか考えていないのだろう。

そんな者達が権力を持ち、今の様な時代が出来上がってしまったと言っのだから、何とも皮肉なものだ。

「さあて……早いとこ済ませちまおうか」

青年は両手をポキポキと鳴らすと、蔵に付いているダイヤルの前に屈みこむ。

「ええっと……アイツの情報だと、丑……辰……酉……」

何やらボソボソと呟きながら、慎重にダイヤルを回していく。

彼の言う「アイツ」が誰なのか、という事が皆さん気がかりであるうが、追々分かってくる事なので、此処での紹介は遠慮させてもらおう。

その時。

カチツと、蔵の扉が甲高い声を発した。

青年は一瞬眉を顰め、ゆっくりと立ち上がり、蔵の扉から離れていく。

すると、

ゴゴゴ……と、地鳴りの様な音が屋敷中に響いた。

同時に、漆黒に染まった重い扉が、ゆっくりと開いていく。観音開きの要領で扉は開き、九十度開いた所でガゴン！！と音を立てた。

直後、再び静寂が辺りを支配する。

だが、今の大音響は、武士達の耳にも届いただろう。

「急いだ方が良さそうだな……」

言うが早いか、青年は闇に染められた蔵の中へと入っていく。

内部を照らすのは天窓から漏れる月明かりだけだったが、青年はまるで数十個の電球に照らされているかのような錯覚に陥った。

原因は、蔵の中を埋め尽くす様に置かれている金銀財宝。

大判小判を始め、多くのお宝が、まるで奪ってくれと言わんばかりに置かれている。

青年は懷から袋を取り出し、財宝をその中へ乱暴に入れていく。

「よくもまあこんなに溜め込んだもんだねえ……」

おそらく南蛮からの輸入物であろう金や銀で出来た装飾品を袋に仕舞いながら、青年は言う。

そして、財宝で一杯になった袋を右手一本で抱え上げ、右肩に担いだ。

「よし……用も済んだし、とんずらすると……」

青年が言いかけた、その時。

「貴様！ 何者だ！」

男の怒声が、蔵の中に響き渡った。

青年は忌々しげな様子で眉を顰め、声の方向へと首を回す。

そこには、三人ほどの武士が、青年に刀を構えていた。青年は目を笑みに歪ませ、態勢を低く構え、地を強く蹴る。

一瞬。

今の状況を、これほど端的に表している言葉は無いだろう。もし仮に言い換えるとしたら『刹那』だろうか。

そう思えるほど、青年が武士との間合いを詰めるのは速かった。

武士は三人とも目を見開き、懷に飛び込んできた青年を見る。

「っ、貴様！」

直後、ほぼ同時に刀を振り上げ、そして、振り下ろす。

だ。。。

シュッ！！ と、空を切る音が三つ重なる。

その直後、三つの鋼がガキン！！ と音を立ててぶつかり合った。三人が刀を振り下ろした先には、もう何も無い。人がいた痕跡すらも。

三人の武士は目を見開き、きよろきよろと闇の中を見渡す。
直後。

ふわり と。

何かが月明かりを閉ざした。

その瞬間、ガゴン！ 天窓を開く音が三人の耳を打つ。

武士達がそちらに視線を向けるのは、ほぼ同時。

そして そこに立つ青年の姿を瞳に映すのも、ほぼ同時だった。

青年は左手を、口元を覆う黒い布へと運んでいく。

そして、ゆっくりとその布を剥ぎ、武士達に素顔をさらした。

それはとても儚げで そして、美しい青年だった。

少し濁れた灰色の髪に覆われた切れ目には、真っ赤な瞳が怪しく光っている。目元には、真紅の入れ墨が、まるで血の涙の様に描かれ、彼の白い肌を染め上げていた。

「っ！ 貴様……まさか！」

武士の一人が、目を見開き、声を震わせて言う。

青年は答えず、代わりに上唇を吊り上げ、左手を軽く武士達に向けて振り、告げる。

「毎度あり〜。こいつ等は貰ってくぜ」

同時、青年の姿は天窓から消えた。

残された武士達はしばし呆然と立ち尽くす。

しばらくして、我に返った武士の叫びが、屋敷中に響いた。

「アイツだ！ アイツが……？ 賊？ が出たぞ！！」

青年は蔵を抜け出すと、屋敷の屋根の上を走り抜ける。

財宝さえ手に入れば、彼にとつてこの屋敷にもう用など無い。後はこの屋敷から逃げ出すだけだ。

だが　　そう簡単に彼を逃がすほど、彼らは甘くない。

青年の前に、騒ぎを聞きつけた武士が立ちはだかる。

数は、三。

青年は面倒といった様に眉を顰めたが、直後、淡い笑みを浮かべた。

そして、袋を左手に持ち直し、右手で腰に付けているモノを握り締める。

それは、馬をも斬ってしまいそうな、巨大な刀だった。

しかも、ただの刀とは違う。

鞘から抜いてみれば、その刀身は淡い桃色に染め上げられ、その中に色鮮やかな桜吹雪が描かれていた。風情を重んじる彼が、頼んで描いてもらったのだ。切れ味を落とさない為か、刃の部分には描かれていない。

青年はその刀を逆手に持ち、武士へと駆けていく。

武士は刀を握り締め、そのまま青年目掛けてそれを真横に薙いだ。青年は目を細め、その巨大な刀を振るう。ガキン！！と音を立て、二つの刃がぶつかり合う。

直後、青年は武士の頭上に跳ぶ。そしてそのまま、右足で武士の頭を蹴り飛ばした。武士はそのまま身体を揺らし、屋根の下へと落ちていく。

青年はそんな彼を横目に、次に構える武士目掛け、駆ける。

武士は刀を握り締め、それを縦に振るう。

彼は今の青年の動きを見ている。もしまた刀を振るってくれば、それを受け流し、一気に青年の懐に入り込み、そのまま屋根の下へ

と突き落とす。

武士は思わず笑みをこぼし、待つ。

自身の罠に獲物がかかるのを、じっと。

だが、青年が次にとった行動は、武士の予想の斜め上に行くものだった。

青年は態勢を更に低くすると、身体をひねり、紙一重で刀をかわしたのだ。

「どうした？ 懐ががら空きだぜ？」

あざ笑う様にいい、青年はそのまま刀を裏返し、武士のわき腹を打撃する。武士はうつ！ と息を詰まらせ、そのまま地を目掛けて落ちていった。

青年はゆらり、と態勢を高く直し、残る武士を見据える。

武士はと言うと、顔をこわばらせ、刀を構えていたが、その刀身はがちがちと震えていた。

青年はしばし武士を見つめると、再び地を強く蹴り、武士目掛けて駆け出す。

「う……うわあああ！！」

武士は雄たけびを上げ、刀を横に薙ぐ。
だが

「ぐっ！」

直後、武士の視界は黒に覆われることとなった。

刀を薙がれた瞬間、青年は彼の顔を踏みつけたのだ。

青年はそのまま大きく飛び上がり、屋敷の塀へと着地する。

「さあて……もう一仕事して来ますか」

笑みを浮かべ、青年は呟く。

そしてそのまま、青年は塀から向かいの民家の屋根に飛び移り、再び夜闇を走り出した。

「坊……そろそろ寝なさい」

先ほどの長屋の一室で、母親は未だに外に出て空を見つめる少年に告げる。

「えゝ？ でも、まだぎぞくさんが来てないよ？」

拗ねた様に、少年は先ほど母親から習った正義の味方の名を言う。母親は思わずくすりと笑い、少年の傍らに立った。

「義賊さんも忙しいんだよ、明日になったら来てくれるさ」

「本当？」

「ああ……だから寝よう？」

「うん！」

少年は笑い、母親も笑う。

そして二人が眠りに付こうと部屋へ向かった、その時だった。

ちゃりん　と。

人気の無い界限に、甲高い音が鳴り響いた。

部屋に入りかけた母親と少年は、音のした方へ視線を向ける。

そしてそこに落ちているものを見て、母親は目を見開き、少年は満面の笑みを浮かべた。

「小判だ！」

そこには、小判が大量に散らばっていた。それだけではない。先ほどの音に続く様に、ちゃりちゃりちゃりん！！と小判が界限に次々と振り落とされていく。

それを聞いた住民達も何事かと表に出て、その瞳を見開いた。

「小判だ！ 小判が降って来たぞ！」

一人の男性の掛け声と共に、住民達は血眼になって小判を拾い集めた。

しばし目を見開いて茫然としていた母親も、ゆっくりと屈み込み、小判を一枚手に取る。するとそれは、ずしりと母親の掌を圧迫した。

直後、母親は思わず涙を流した。

そんな彼女を、少年の無邪気な笑みが照らす。

「やつぱり来てくれたんだね！ きぞくさん！！」

母親は、笑った。

「ああ……そうだね」

青年は大阪界隈を過ぎ、そのまま街の中心部へと駆けていく。
街一番の巨大な屋敷の三角屋根に飛び降り、そのまま頂点目掛けて地を蹴った。

その時、

「あつ！ 『彼』だ！ 『彼』が出たぞ！」

一人の男性が、屋根の上の青年を指差して、叫んだ。それと共に、踊っていた民衆達は一斉に屋根の上を見つめる。直後、地鳴りの様な大歓声が、城下町に響きわたった。

その光景に、屋根の頂点に立った青年は笑みをこぼす。

「こりゃあ絶景だねえ！ 巻き甲斐があるってもんだ！」

青年は直後、袋の中の大判小判を両手一杯に掬い上げ、民衆達を見下ろし、叫ぶ。

「おめえ等！ 今夜はこれでパーツとやってくれや！」

そして青年はその大判小判を

民衆の海へとばら撒き始

めた。

民主達は尚一層歓声を上げ、天空へ向けて手を伸ばす。地に落ちれば、それを拾い上げ、屋根の頂点に立つ青年に掲げた。最大限の感謝の意を、示すかの様に。

一通り巻き終え、青年は腰に手を当てる。

「大体こんなもんか……早くしねえと、また追っ手が来るかもしれねえしな」

青年は言い、わずかに残った銭が入れた袋を抱え上げ、民衆を見据える。

「おうおうおめえ等！ 今日これで終えだ！
最後に、俺の名をその耳に刻んどきな！」

青年は左手を大きく開き、その名を叫んだ。
民衆達にとって、希望の光となっている、名を。

「天下の大泥棒『石川五右衛門』 たあ、俺の事よ！！！」

彼の後ろで、巨大な炎の花が、鮮やかに咲き乱れた。
民衆の英雄を、称えるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8320x/>

時空盗賊絵巻

2011年11月12日22時27分発行